

生徒による歴史像の創出とドラマ教育

－ 「日本史」と「世界史」の区分を問い直す高校「日本史探究」の単元開発 －

教科教育高度化分野 (22821720) 伊藤 瑞 夏

本研究の目的は、「日本史」と「世界史」を横断し、生徒が新たな歴史像を創出できるような高校「日本史探究」の単元を開発することである。単元には同時代史的空間での歴史的人物の空想上の対話(LINE)を位置づけた。このドラマの手法の活動により、空間的広がり意識しながら同時代史的観点から歴史を捉え直すことが可能になることと、生徒が「日本史」と「世界史」を横断する学習に対して肯定的であることが明らかになった。

[キーワード] 高校日本史探究, 高校歴史総合, 歴史像, ドラマ教育, 単元開発

1 問題と目的

高等学校学習指導要領(平成 30 年告示)は、地理歴史科の科目編成の見直しを行い、科目を新設した。その一つである「歴史総合」は、従来の「日本史」「世界史」という区分を問い直し、双方で扱ってきた出来事を横断して教える科目である。これはナショナル・ヒストリーとして語られてきた「日本史」を相対化し、「世界史」の文脈で書き換えることを意味する。それに伴い教科書も「世界史」のようなグローバルな空間的広がりの中に「日本史」を位置づける構造へと変化した。

同じく今回新設された「日本史探究」は、「世界の歴史と関連付けて総合的に理解する」ことを目標に示している。従来の「日本史B」よりも、世界の空間的な認識の中で日本の歴史を捉える要素を強めており、「日本史探究」の授業は「歴史総合」同様に、同時代のグローバルな空間的広がりの中で学習する必要がある。

では、「日本史探究」の学習において、生徒が「日本史」と「世界史」を横断するような新たな歴史像を描くことは、どのようにして可能になるのだろうか。筆者は、授業にドラマの手法を取り入れることで、生徒による新たな歴史像の創出を促すことに繋がると考える。本研究では、ドラマの手法を「ある役柄になって考えたり演じたりしながら、実感をもって学ぶ学習方法」と定義する。

本研究の目的は、高校「日本史探究」の授業にドラマの手法を取り入れることで、「日本史」と「世界史」を横断し、生徒が新たな歴史像を創出できるような単元を開発することである。

2 先行研究の検討

(1) 高校地理歴史科の再編成

高等学校学習指導要領(平成 30 年告示)は、共通必修履修科目として「歴史総合」「地理総合」を設置し、選択履修科目として「日本史探究」「世界史探究」及び「地理探究」を設置した。これは、従来の地理歴史科が掲げてきたねらいを踏まえつつ、時間認識と空間認識をバランスよく総合する人材育成を目指した科目構成である。

「歴史総合」は、「地理総合」と相互補完的な役割を果たしながら、従来の歴史領域の科目のねらいを総合的に踏まえて設置した科目である。以下のような性格を持つ。

近現代の歴史に関わる諸事象について、世界とその中における日本を広く相互的な視野から捉え、資料を活用しながら歴史の学び方を習得し、現代的な諸課題の形成に関わる近現代の歴史を考察、構想する。

「世界とその中における日本を広く相互的な視野から捉え」とあるように、「歴史総合」は、従来の「日本史」と「世界史」という区分を問い直し、双方で扱ってきた出来事を横断して教える科目である。この点について、成田(2023)は以下のように述べている。

これまでナショナル・ヒストリーとして叙述され教育されてきた「日本史」を、「世界史」の文脈で書き換えることを意味する。他方、世界史もその実、各国史の束として記されて

きたことを考え合わせると、「歴史総合」の意図するところは、ナショナル・ヒストリーを相対化し、あらたな歴史認識と歴史叙述を提供する営みとなる。

従来から「日本史」は歴史過程を重視し、歴史的事象を時間軸に論じることが多い。一方「世界史」は幅広い地域を扱うため概念を重視する。「歴史総合」は、「世界史」のような同時代のグローバルな空間的広がりの中に、「日本史」を位置づける。その特徴は教科書にも表れている。

例としてロシア革命を取り上げる。ロシア革命について「歴史総合」の教科書は、ロシア革命の影響により各国に社会主義運動が拡大したという文脈で、ロシアの動きとヨーロッパ、日本、中国、東南アジア各国を関連付けて学習する構造になっている。一方、「日本史探究」の教科書はロシア革命の影響として、シベリア出兵や他国から日本への批判が高まったことを取り上げている。日本国内の社会運動については政党政治とデモクラシーの範囲で扱い、ロシア革命と社会主義運動の高まりは、同じ学習範囲に位置づけられていない。

成田が言うように、ナショナル・ヒストリーを相対化し、あらたな歴史認識と歴史叙述を提供するには、各国ごとの事実の推移よりも、同時代のグローバルな空間的広がりの中で、生徒が「日本史」と「世界史」を横断するような新たな歴史像を描くことが問われると筆者は考える。

歴史像とは歴史観と歴史事実の中間に形成される段階である。藤岡(1991)は、歴史教育の内容を教えるカテゴリーとしては、歴史観と歴史事実という二つの対比だけでは不十分であり、歴史観と歴史事実の中間に歴史像ともいうべき段階を挿入した構造で捉える必要があると述べている。藤岡によれば、歴史像は、歴史観に支えられることによって全体的なまとまりをもっている。それは同時に一方で歴史事実に裏づけられることによって、一定の客観性を備えた像ともなりえている。

本研究は、グローバルな同時代史的把握を重視する歴史観に立ち、そこで生徒が歴史事実をもとに多様に歴史像を描き出すことを位置づけたいと考えている。

(2)「日本史B」と異なる「日本史探究」の独自性
「日本史探究」は、「歴史総合」の学習によって身に付けた資質・能力を基に、従来の「日本史A」

「日本史B」のねらいを発展的に継承している科目である。「日本史B」の目標と「日本史探究」の目標(1)は、「我が国の歴史の展開を諸資料に基づき地理的条件や世界の歴史と関連付けて総合的に考察あるいは理解する」とする。どちらも日本の歴史を世界の歴史と関連付けて総合的に捉えることを示している。この部分に対応する解説で「日本史B」は以下のように示している。

指導に当たっては、同じ地理歴史科の世界史や地理との関連を一層重視して、我が国の原始・古代から現代に至る歴史の展開を、地理的条件や世界の歴史と関連付けて、政治経済社会文化国際環境など歴史を構成する要素を総合した幅広い見方で大きく把握させるようにする。

一方、「日本史探究」は以下のように示す。

総合的に捉えて理解するとは、我が国の歴史の展開について、時間軸の中での連続性や、地域と日本、世界の空間的な認識、政治や経済、社会文化国際環境など各時代の特色及びその変遷など様々な側面から、我が国の歴史を捉えることができるようにすることである。

両者を比較すると、「日本史探究」は「日本史B」にはない「地域と日本、世界の空間的な認識」を位置づけている。世界地図を意識した日本史の学習を求めているといえる。

以上の点から、「日本史探究」においても「歴史総合」と同様、同時代のグローバルな空間的広がりの中で学習し、「日本史」と「世界史」を横断するような新たな歴史像を描くことが重要であると考える。

(3) ドラマ教育と先行実践の検討

渡部(2010)は、ドラマを活用することで、深く豊かな学びの世界を開拓し、学びをよりいきいきしたものへ変革できると提案している。ドラマの手法によってフィクション(虚構)の世界と現実の世界を往復し、身体や五感を駆使し学びを深めることができる。

筆者は「ある役柄になって考えたり、演じたりする」ことは、自分とは異なる視点に立つということと考える。教科書のような俯瞰的な視点で歴

史を捉えるのではなく、誰かの視点、または複数の視点から歴史を捉えた際に、新たな歴史像の創出を期待できると筆者は考える。

小西(2022)は、時空を超えた歴史的対話を再現する授業を実践している。過去にもしも LINE があった場合、遠く離れた歴史的人物どうしでどのような会話が交わされたか、生徒が学習した知識を活用し再現をする。小西は、対話を行う人物として、同時代に生きた日本の人物と外国の人物を取り上げ、遠く離れた人物同士をつないでいる。例えば、松平定信とマリー・アントワネットの対話である。それにより、同時代の「日本史」と「世界史」を横断するような学習を可能にしている。加えて、生徒は歴史的人物として会話を考えることで、その人物の視点から歴史を捉えることになる。複数の視点から世界の動向に迫ることで、新たな歴史像の創出を促していると考えられる。

以上から、「日本史探究」の授業において、時空を超えた歴史的対話を再現することで、生徒が新たな歴史像を創出することに取り組みたい。

3 授業実践

日本史探究「武士の政治進出」の小単位において、山形県内 A 高等学校、第 2 学年 2 学級 53 名を対象に授業実践を行った。先に授業を行った学級を A 学級、後に授業を行った学級を B 学級とする。

本小単位は高等学校学習指導要領(平成 30 年告示)の「日本史探究」の大項目「(B)中世の日本と世界」の中項目「(1)中世の日本と世界」の「権力の主体の変化、東アジアとの関わりなどに着目して、古代から中世の国家・社会の変容を多面的・多角的に考察し、表現すること」に基づき設定している。単元目標は次の通りである。

(1) 単元目標

貴族政治の変容と武士の政治進出を関連づけ、古代から中世への時代の転換を理解することができる。(知識及び技能)
武士の政治進出と東アジアとの交流が社会に及ぼした影響を多面的・多角的に考察し、12 世紀における東アジアと日本の関係について、広く相互的な視野から捉え表現することができる。(思考力、判断力、表現力等)
武士の政治進出と東アジアとの交流が及ぼした影響について粘り強く追究することができる。(学びに向かう姿勢、人間性等)

本研究では、平氏が政権を築き発展する過程に焦点をあてる。平氏政権は、宋との貿易を活発に行っていた。これは日本に限った動きではない。907 年の唐の滅亡により、東アジアの国際秩序で

あった冊封・朝貢体制が衰退したことで、東アジア文化圏の統合はゆるみ、諸地域間の民間交易が活発化した。加えて、各地域は中国文化を基礎としつつ、それぞれ独自の特色ある文化を形成していった。

本小単位は平氏政権が台頭した日本国内の変化を捉えたうえで、日宋貿易という東アジアとの交流から、世界の大きな動きのなかに日本を位置づけ考えることができる単元である。

(2) 単元計画と実際

教時	学習活動
1	貴族政治の変容や保元・平治の乱、朝廷への接近を背景として平氏が台頭する過程を理解する。
2	唐の滅亡後、東アジアの諸地域が自立化する様子を 8 世紀～13 世紀の地図と関連づけながら捉える。日本と中国の関係の変化から、東アジア諸地域全体の変化を考察する。
3	学習内容をもとに、日本と南宋の国内の様子等を LINE の対話形式で表現する。

1 教時目は武士の政治進出について扱い、平氏が台頭し政権を築く過程を理解する。保元・平治の乱を経て、武士に対する朝廷の認識が変化したことや、平氏が朝廷へ接近することで力をつけたこと、平氏政権は貴族的性格と武家的性格を併せ持つ政権であったことを捉える。平氏政権の特徴として日宋貿易を重点的に扱い、平氏政権が貿易に力を入れていたことを捉えさせる。

2 教時目では、「8 世紀～13 世紀の東アジアの地図から、諸地域の変化を考察しよう」という学習課題を設定した。8 世紀から 13 世紀までのアジア世界の地図を用いながら、同時代の東アジアの大きな動きを捉える。10 世紀前半に唐が滅亡したことを皮切りに、勢力が移り変わっていく様子をおさえ、「日本と中国の関係の変化」「宋銭が出土した遺跡の分布」「日本と高麗の類似点」をもとに、東アジア文化圏の統合がゆるんだことで、各地域において自立化の動きが進んだことに気づくことを目的としている。その中で、東アジアの他の地域でも日本と同様の動きがみられることや、東アジア全体を舞台とする商業がダイナミックに行われており日本もそれに組み込まれていたことを捉え、日本と世界の繋がりをおさえる。A 学級では、各時代の日中間の貿易品に注目する学習プリントを使用し授業を進めた。B 学級では、各時代の日中間の貿易体制に注目する学習プリントを使用した。

3 教時における単元のまとめでは「清盛と孝宗のLINEを考えよう」という学習活動を設定した。対話を行う人物として、平清盛と、南宋の2代目の皇帝である孝宗を取り上げた。二人の対話は1179年の12月に行われた設定である。生徒は4人程のグループに分かれ、活動を行う。過去にもしもLINEがあつたら、遠く離れた歴史的人物どうしでどのような会話が交わされたか、生徒が学習内容を活用し清盛と孝宗の対話形式で再現をする。活動の前に、Jamボードを用いて日本と南宋の情報を観点ごとに整理し、それをもとに対話を創作した。平清盛と孝宗、それぞれの立場から事象に迫ることによって、同時代の広がりの中なかで、各地域の動きを比較しながら多面的・多角的に考察し、生徒が新たな歴史像を創出することを期待し設定した。A学級では、歴史的人物の口調や関係性、話題等を全て生徒が自由に創作した。しかし、所定の授業時間で作品を完成させることが困難であつたため、B学級では対話の冒頭を提示し、それに続ける形で創作しても良いとした。

単元の終了後、以下の内容で生徒にアンケートを実施した。

設問1	活動してみて楽しかったことを教えてください。
設問2	活動で考えにくかったことを教えてください。
設問3	学習内容で一番印象に残っていることは何ですか？
設問4	「もっとこうしたらいいんじゃない!？」など活動の改善点を教えてください。
設問5	私が担当させていただいた授業は、日本史と同時代の世界史を繋げて考えるということを目的としていました。日本史と世界史を同時に学習することについてどう思いますか？

(3) 生徒が創作した対話

以下は、3教時目においてA学級のグループが創作した作品の一つである。日本と南宋の違いを明らかにしながらも、私貿易が活発化した背景や、日本と世界の繋がりを捉えている点が特徴的な作品である。

作品1

清盛：ご機嫌いかがでございましょう、孝宗殿。
孝宗：えーと、どなたでしょう??
清盛：失礼いたしました。私は日本の武士の平清盛と申します。 最近のお国の調子はいかがでございましょう。 我が国では、平安朝の貴族政治が続くなか、律令体制の崩壊が進行しておりますゆえ、遣唐使の派遣までも停止されまして…。
孝宗：なるほど一、こっちは中央集権のために科挙を導入した

んだけど財政難で困っちゃうんだよなあ…。
清盛：そうでございましたか! そうでありましたなら、私めにいい案がございます。
孝宗：えーなにー! ? わくわくします!!!!
清盛：貿易を結ぶのはどうでしょう!
孝宗：貿易ですか! ちなみに私の国にはどんな利益がある感じなんですか?
清盛：まず貿易は、互いの国に莫大な利益をもたらします。文化や物品など互いの国に互いの国にしかないものが輸入されるのです。
孝宗：ふむふむ…我が国では今、経済の中心が華北から東南の江蘇・浙江・福建に移り変わり、草市・鎮などの商業町が現れ始めたところです。 あなたたちとの貿易は、我らにとっても利益が大きいと考えられます。
清盛：ええ! 我々は我が国に、中国の文化を取り入れてたいと考えておまして…! 儒学や朱子学、他にも『四書』と呼ばれる書物が重んじられていると耳に挟んでおります。
孝宗：え、めっちゃ話はやくて助かる! んじゃあ結ぶってことで決まりすね!!
清盛：本当でございましょうか!! 大変嬉しゅうございます。
孝宗：我が国は朝貢関係を結ぶことに積極的ではなかったけど許す! 貿易活発にしようね(ハートの絵文字)
清盛：ありがとうございます。それでは詳細が決まり次第、また連絡いたします。
孝宗：おっけー待ってるねん(キラキラの絵文字)
清盛：(さよならのスタンプ)
孝宗：(さよならのスタンプ)

この作品は清盛が孝宗に貿易の話を持ち掛ける形で会話が進んでいく。「清盛：まず貿易は、互いの国に莫大な利益をもたらします」「孝宗：あなたたちとの貿易は、我らにとっても利益が大きいと考えられます」と表現していることからわかるように、日宋貿易は日本(平氏政権)と南宋の両国にとって利点があつたため、活発化していったことを捉えている。この作品を創作した生徒の一人は、アンケートの設問3において「お互いが利益を求めるうちに私貿易に発展したことの経緯を理解できた」と回答している。利益の具体的な内容として「文化や物品など互いの国に互いの国にしかないものが輸入される」と作品中で表現している。対話中では、貿易品の使い道やそれぞれの国に与えた影響等までは語られていない。しかし、生徒が情報を整理したJamボードを参照すると、

南宋の貨幣経済の発展や、日本国内での貿易品の流通などにも注目しており、前後の学習と関連付け深められる可能性が大いにある。中国の影響を始めとし、他国との繋がりのもと、日本の歴史が形作られていることを、生徒が実感することに繋がると考える。

以下は B 学級のグループが創作した作品である。

【作品 2】

清盛：こんにちは～。
 孝宗：清盛くんだけ？
 清盛：せやで。
 孝宗：清盛君大丈夫そ？
 清盛：保元の乱、平治の乱どちらも勝って太政大臣なれたわw
 孝宗：やるじゃんww
 清盛：私の力で武家中心の政治にしてみたわww
 孝宗：え！やば！こっちも武臣が中心のせいじなんだよね～。
 清盛：最近貿易の調子どうなん？
 孝宗：（グッドスタンプ）
 清盛：こっちも大輪田泊を改装してチョコブリグ。
 孝宗：朝貢関係ってだるくない？
 清盛：それな
 じゃあうちらで貿易しようよーww
 孝宗：日本と南宋だから「日宋貿易」ねwwはい、けってー。
 12月25日
 清盛：突然なんだけどさー。
 やっぱり信じるべきは力だよね。
 孝宗：（グッドスタンプ）

この作品は朝貢貿易から私貿易に変化したことを捉えている点の特徴的である。作品 2 を創作した 4 人の生徒はいずれも、アンケート設問 3 の一番印象に残ったこととして、朝貢貿易から私貿易へ変化したことを挙げている。唐の滅亡により東アジアの国際秩序であった冊封体制が崩れた。南宋は他国と朝貢関係を結ぶことに積極的でなかったため、日本に対しても朝貢を要求せず私貿易を行っていたことが「孝宗：朝貢貿易ってだるくない？」と清盛に同意を求める形で表現されている。

4 考察

(1) 清盛と孝宗の LINE の生徒の捉え

今回の実践におけるドラマの手法の有効性について考察する。今回の授業実践では、ドラマの手法における「ある役柄になって考えたり、演じたりする」ために、LINE というツールを用いた。清盛と孝宗の LINE を創作するという活動を、生徒た

ちはどのように捉えたか生徒が創作した作品とアンケート結果から考察する。

設問 1
ラインという現代らしいもので考えるのが楽しかった。
歴史上の人物同士の間風の会話をつくることが楽しかった。
班の人とリアルな感じを追究できて楽しかった。

以上の回答をはじめとし、多くの生徒が LINE という現代的なツールで表現することに面白さを感じていたことが分かった。生徒が創作した作品は、二人のアイコンを加工したり、目をまたぎ追ってメッセージを送ったり、スタンプを使用したり等、様々な遊び心や工夫が見られ、生徒たちが実際の LINE らしく二人の対話を表現しようとした様子が分かる。当時ではありえない設定や、高校生にとって馴染み深い LINE というツールが生徒達の関心を引き付け、創造性を刺激したと考察する。

先ほど取り上げた作品 2 を創作した生徒のうち二人は設問 1 で以下のように回答した。

設問 1
孝宗についての情報があまりない中で、班員たちと色々考えながら自分たちで孝宗の人格をつくっていくことが楽しかった
会話の内容や人物の性格を考えることが楽しかった

歴史的人物のキャラクターを自分たちで自由に考えることに楽しさを見出している。では、生徒たちは清盛と孝宗のキャラクターをどのように考え表現したのだろうか。創作した作品と活動中の会話記録から考察する。以下は、LINE 上での対話においてどこでスタンプを使うか吟味している場面である。

生徒 1：ここがスタンプの使い時。
 生徒 2：だめだろ！笑
 生徒 3：会話終わっちゃうよ。清盛可哀そう。
 生徒 4：終わる終わる。途中だと話切り上げたいみたいになる。
 数分後
 生徒 3：やっぱりスタンプだと孝宗、返す気ないように見えるよね。
 生徒 1：うん、でもまあアリ？
 生徒 2：清盛って武士でしょ、どっちが偉いの？
 生徒 4：…皇帝？でも、朝貢貿易に積極的じゃないから。
 生徒 3：一応対等なのか。
 生徒 1：でもどっちかっていうと孝宗の方が上そう。
 生徒 2：実際は、的なの？
 生徒 3：確かに。イメージはあるかも。
 生徒 2：大きさ…規模、あっちの方がでかいかな。
 生徒 1：日本以外にも貿易してるしめんどくさそうじゃね？
 他 3 人：あー。

会話の中で、清盛と孝宗の身分について検討している。生徒たちは最初、朝貢関係が衰退し私貿易が発展したという学習内容を踏まえ、二人は対等な関係であると考えている。しかし、清盛は武士で、孝宗は大国の皇帝であることを確認し、実際には孝宗の方が、身分が高かったのではないかと考えている。会話からは、スタンプを使用するのはメッセージのやりとりを終わらせたい時、返信するのが面倒くさい時であると生徒たちが捉えていることがわかる。創作した作品と合わせてみると、清盛の問いかけに対して、孝宗がスタンプのみで返信している場面が2回ある。清盛とのLINEを終わらせたいという態度や、孝宗が清盛を少々下に見ている様子を表現したのだろう。他にも活動中に、清盛の話し方を関西訛りにしてはどうかという提案する場面もあった。学習内容を踏まえながらも、生徒たちが歴史的人物のキャラクターを自由に形作り、楽しみながら表現していることがわかる。

その一方で、自分たちで歴史的人物の性格を考え表現することが難しいと感じた生徒も多かった。

設問2
歴史上の人物の性格、人柄を考えてメッセージを考えること。
その時代の情景や言葉などを想像して考えるのが難しかった。
実際に見たこともなければ性格なども分からない人物同士だったので、そういった点では(会話を考えることが)初めての経験だなあ~と思った。

回答にもあるように「実際に見たこともなければ性格なども分からない人物同士」の対話である。では、生徒は何を基にしてそのような人物達の性格を考え対話を創作したのか。学習内容や自分たちで調べた情報を基にする他ないだろう。他者になりきって会話をするという事は、その人物についてよく知らなければ実現できない。しかし逆を言えば、他者になりきるということはその人物についてよく知る機会、手段になる。この点にドラマの手法の有効性があると考察する。

加えて、アンケートの設問5では以下のような回答もあった。

設問5
ただ授業で習ったことを復習するのではなく、LINE風に復習できたことが楽しかった。
真面目に暗記ばかりするのではなく話し合ったり発表し合ったりして理解していく過程が楽しかった。

生徒は、暗記ではなく活動の中で学習内容を理解していくことに面白さを感じていることがわか

る。歴史的人物どうしのLINEを創作するという活動は、生徒が学習内容を活用しながら、実感をもって学ぶことを可能にしていると考えられる。

(2)「日本史」と「世界史」を横断する学習への生徒の迫り方

学習を通して、生徒が同時代のグローバルな空間的広がりの中で「日本史」と「世界史」を横断するような新たな歴史像を描くことが可能になったか考察する。

はじめに、生徒が創作した作品から分析を行った。以下はA学級のグループの作品の一部である。

【作品3】

孝宗：科挙出身の官僚による政治を行っているんだが、どう思う？
清盛：科挙とはなんだ？
孝宗：官吏の採用試験のことだよ。
清盛：こっちの国では武士が政治を行っているぞ。
孝宗：それだと有能な人が使われないではないか。
清盛：有能な人より戦いが強い人の方が日本では上なんだ。
孝宗：宋とは全然違うんだね。

このグループは、日本と南宋の政治について注目し対話を創作した。平氏が台頭し、政治の実権を武士が握り始めたという状況と、南宋の文治政治を対比し対話の中で表現している。生徒の作品を分析すると、このように日本と南宋の状況を比較し、会話の中で各国の特徴を表現したグループが多かった。

他には、作品1,2と同様に、日宋貿易について注目し対話を創作したグループが多かった。日宋貿易について「日本史探究」では、主に平氏政権の財政的基盤や影響力の大きさとして扱う。一方、作品1は、日宋貿易を互いの国の利益を求めらるうちに行われたものとして表現している。作品2は、朝貢関係が衰退し、日宋貿易は私貿易の体制で行われたことを表現している。以上の点から、生徒は日宋貿易について、教科書とは異なる捉え方をしていると言える。貿易が発展した経緯や貿易体制の変化について、日本と南宋の二つの視点から捉えることで、新たな歴史像の創出が可能になったと言える。東アジアの国際秩序の変化という「世界史」の文脈の中で日本を捉えることができおり、「日本史」を「世界史」のなかに位置づけることができていると考える。

生徒が創作した作品を分析し、他に特徴的だっ

たのは、13 作品中 9 作品と多くの作品で、対話中に地名が登場しているという点である。これは生徒が位置関係を意識し、空間的広がりを感じながら学習することができていたためだと考察する。

続いて、アンケートの回答から分析を行う。

設問 5
日本のことばかりだと時代があまり理解できなくて困っていたけど、世界史を繋げたら自分が知っている言葉や出来事がたくさんあって、この時の出来事なんだとか、離れたところではこんなことが起こっていたんだとか色々頭に浮かんできて楽しく学べるようになっていました。
日本史だけでなく同時代の世界史を知ることで、世界ではこんなことがあったんだと見る世界をととても広げることができてもっと世界史のことを知りたくなった。

アンケートを見ると、学習を通して「日本史」と「世界史」を繋げて考えることに肯定的な意見をもった生徒が多かった。「日本のことばかりだと時代があまり理解できなくて困っていたけど」「この時の出来事なんだとか、離れたところではこんなことが起こっていたんだとか色々頭に浮かんできて」とあるように、日本の歴史事実の推移ではなく、世界との中の日本を広く相互的な視野から捉えることで、「日本史」の学習内容が理解しやすくなっている。「日本史」と「世界史」を繋げて考えることで、学習量が増えることを懸念する意見があるかもしれないが、生徒にとってはむしろ学習内容がわかりやすくなっている。また、「見る世界をととても広げることができてもっと世界史のことを知りたくなった」とあるように、生徒が学習を通して視野や関心の広がりを実感したこともわかる。「日本史」と「世界史」を関連付けて捉えようとする姿勢が見え、その重要性に気づいている。

その一方で、「日本史」と「世界史」を繋げて考えることを難しく感じた生徒もいた。

設問 5
日本と世界を比べながらしなければならなかったので大変だと思った。
日本史と世界史は全然違うようで実は日本の動きが連動していることも多くて、習ったことを踏まえて考えていくことが多く、難しいと思った。

生徒は、学習を通して日本の歴史的事象が「世界史」と連動していることに気づいた。しかし、「日本と世界を比べながらしなければならぬ」「習ったことを踏まえて考えていくことが多く」という記述からわかるように、「日本史」と「世界史」の比較や、ただ歴史過程を学習し人物名や事象を覚えるのではなく、それらを踏まえて考える

ことが必要となり、難しさを感じている。「日本史」と「世界史」の区分を取り去ることの難しさも見えた。

(3)単元の改善点と課題

単元の改善点は三点ある。一点目は、生徒が十分に思考できる内容の資料を提供する必要性である。A 学級の 3 教時目において、グループ活動中に以下のような会話があった。

生徒 5：孝宗って情報なくてムズイ。
生徒 6：ん？
生徒 5：だってさ、松平定信とかマリーアントワネットってやりやすいじゃん。名言とかあるし。こいつ…。
生徒 6：調べてみよか。松平定信ってなんだっけ。
生徒 5：松平定信と、松平定信とマリーアントワネットだと、ほら名言とかあるし調べやすいけど、この二人は全然知らないから、難しくない？って話。
生徒 7：…うん。ムズイ。

例として提示した松平定信とマリー・アントワネットの会話に比べ、孝宗は生徒にとってあまり馴染みのない人物であるうえに、情報が少ないため対話の創作に苦戦している様子がわかる。他にも設問 2 において以下のように回答した生徒が複数いた。

設問 2
孝宗という人物の情報が少なく南来の情報も少なかったため少し考えにくかった。
世界史の教科書からだ読みとれきれなかった気がしたこと。孝宗が誰だか全然知らなかった。
情報を集めるのが想像以上に難しくうまく会話をつくれなかったこと。

今回は孝宗の資料として、「世界史探究」の教科書、資料集を中心とし、各自クロームブック等で補足情報を集めた。今回取り上げた「孝宗」という人物は有名ではなく、生徒たちにとって馴染みのない人物だったため、イメージがなく性格を考えたり対話を創作したりしにくかったと考える。

「日本史探究」の授業で「世界史」の内容を扱う際は、当然「日本史」の資料よりも「世界史」の資料の内容を充実させる必要がある。今回はその点が不十分であった。教師が活動に十分な内容の資料を提供していれば、生徒はより孝宗のキャラクターを鮮明に形作り、さらなる歴史像の創出に繋がった可能性がある。

二点目は、活動後の教師による支援の必要性についてである。生徒の作品を分析すると、生徒が歴史的事象について正確さに欠ける認識をしてい

る部分が多々あった。例えば、作品1, 2の孝宗と清盛が日宋貿易を始めたように表現している部分である。実際には、日宋貿易は二人が実権を握る前から、互いの国の商人によって私的に行われている。朝貢関係ではなく、互いの利益のために私的に貿易が行われるようになったということは正しく捉えられている。しかし、厳密にいうと歴史的事実と異なる表現とも捉えられる。生徒がフィクションの中で豊かに学んだあと、教師が適切に支援する場面が必要になる可能性がある。

三点目は単元構成についてである。今回は、1教時目に「日本史探究」の学習をし、2教時目に東アジア全体の歴史を把握する授業を設定した。この2教時目にあたる世界を大観するような授業を、単元の冒頭に設定した方が、生徒は「世界史」の中に「日本史」を位置づけながら学習する機会がもてたと考える。世界の流れや様子を把握してから、「日本史探究」の内容に移行することで、生徒が自ずと「世界史」の内容と比較・関連付けながら「日本史」を学習できる可能性があった。単元構成の見直しを図る必要がある。

5 到達点と課題

本研究における到達点は二点ある。一点目は、同時代の歴史的人物の対話を創作することによって、生徒が新たな歴史像を創出できたことである。具体的には、日宋貿易の捉え方についてである。日宋貿易について、本来「日本史探究」では平氏政権の財政的基盤として扱う。一方、生徒は活動を通して、貿易体制の変化や私貿易が発展した経緯等、同時代史的な観点から日宋貿易を捉えている。これは、東アジアの国際秩序の変化という「世界史」の文脈に、「日本史」の学習内容を位置づけていると言える。加えて、生徒が創作した対話には、多くの地名が登場しており、生徒が位置関係を意識し、空間的広がりを感じながら学習することができていたと考える。

二点目は、「日本史」と「世界史」を横断して学習することに肯定的な生徒が多かったということである。生徒は世界とその中の日本を広く相互的な視野で捉えることの重要性に気づいている。また、生徒は学習を通して視野や関心の広がりを実感している。「日本史」と「世界史」を繋げて考えることで、学習量が増えることを懸念する意見があるかもしれないが、日本の歴史事実の推移の中

で学習するよりも、「日本史」の学習内容が理解しやすくなっている。

課題は以下の三点である。一点目は、生徒に十分な資料を提供する必要性である。「世界史」の資料内容を充実させることで、歴史的人物のキャラクターを生徒がより鮮明に形作ることができると考える。それがさらなる歴史像の創出に繋がると期待する。

二点目は、活動後の教師による支援の必要性についてである。生徒はフィクションの中で豊かに学ぶ。もし、その内容が正確さに欠ける部分が目立つようならば、場合によっては、活動後教師による適切な支援が必要である。

三点目は単元構成を見直す必要があるということである。単元の冒頭に世界の流れを大観するような「世界史」の内容を学習し、その後「日本史」の学習に移行するよう改善する。そうすることで、生徒は「世界史」の内容と比較・関連付けながら「日本史」を学習することが可能になり、「世界史」の文脈のなかで「日本史」を捉えやすくなると考える。

引用文献

成田龍一(2023)「ナショナル・ヒストリー批判のあとの「日本史」叙述」『思想』, 1188, 岩波書店, pp117-133.
文部科学省(平成30年告示)『高等学校 学習指導要領解説 地理歴史編』, 教育出版。

参考文献

小西正雄(2022)『閑言録』, ERP.
藤岡信勝(1991)『教材づくりの発想』, 日本書籍.
渡部淳・獲得型教育研究会(2010)『学びを変えるドラマの手法』, 旬報社。

Drama Education for Students to Create Historical Images in High School : Curriculum Development of Advanced Japanese History Class to Reconsider the Division between Japanese History and World History
Mizuka ITO